# 井上靖『天平の甍』論

## ――書き換えられた『東征伝』――

山田哲久

### はじめに

鑑真招請の経緯を描いた井上靖『天平の甍』は『中央公論』一九五七年三月号（第七二年第三号）から同年八月号（第七二年第一〇号）にかけて連載され、その後多くの改稿を経て『天平の甍』（一九五七年一二月、中央公論社）として単行本化された。作者である井上靖は「「天平の甍」の歴史小説としての成果」[1]によって、昭和三二年度（第八回）の芸術選奨を授賞している。それまでは現代小説や時代小説を多く発表していた井上が、それらと意識的に区別して「歴史小説」を書くようになったのは、『天平の甍』の好評以降であり、作者にとって転機となった作品と言えよう。

発表当初から注目されたのはその文体と井上の資料への向き合い方であった。例えば、小松伸六は「在来の井上ファンではついてゆけない煩瑣な記録、おどろくべき資料の考証、史実への検討[2]」を読み取り、福永武彦はその文体について「なるべく資料に語らせる方針[3]」と述べている。また、佐伯彰一は物語の特徴を「ゆるがぬ歴史的なワク組」とそれを実現するための「客観的な記述体」「淡々たる年代記的な記述」であると述べる[4]。そして、それらの同時代的な評価は「鑑真に関する部分は、『東征伝』の翻訳[5]」であるとする山田博光や、その文体を「鷗外の史伝に見るような簡潔な記事文体[6]」とする村松定孝の評価へと引き継がれていく。つまり、『天平の甍』は、それまでの井上作品とは異なる歴史小説であり、その変化が文体と資料との関わりの中で意味付けられてきたのである。

よく知られているように『天平の甍』執筆の中心的な典拠となったのが、物語本文にもその書名が挙げられている淡海三船『唐大和上東征伝』（以下『東征伝』）である。注目したいのは井上が『天平

の甍』と『東征伝』の関係性について次のように述べていることである。[7]

小説『天平の甍』はこうした「東征伝」をもとにして、それを小説化したものである。小説化するに当たって、正直なところ私はもうこれに何もつけ加えるものはないと思った。「東征伝」に名前をのぞかせている何人かの人物に血と肉を与える仕事が作家としての私に残されているだけだという気持ちだった。

（傍線引用者・以下同）

ここでは『天平の甍』が『東征伝』を「小説化」したものであり、「小説化するに当たって、正直なところ私はもうこれに何もつけ加えるものはないと思った」と述べられている。例えば、東野治之が「『東征伝』を丁寧にトレースして書かれた井上靖の名作、『天平の甍』などに接するほうが、実感を持って（渡日の苦労を―引用者注）追体験できると思う」[8]と述べているように、『天平の甍』が『東征伝』を「丁寧にトレース」したものであるという評価は現在においても一般的なものであると言えよう。

例えば、槇林滉二が「作品の主要な人物、事件は、それらの殆どが原典に拠っている」[9]と述べているように、これまでの『天平の甍』研究においては、物語がいかに『東征伝』に忠実であるかが検証されてきた。一方で「鑒真を主人公として渡日の大事業を記述する『東征伝』」と、「五人の留学僧を中心にして鑒真渡日という日本文化史上の大きい事件を描いた」『天平の甍』との違いに注目し、「『天平の甍』は単純に『唐大和上東征伝』の小説化であるとは到底言い得ない」[10]と森井道男が述べたように、両者の間には多くの差異があることも事実である。

作者自身は『東征伝』の「小説化」において「何もつけ加えるものはない」という認識だったのかもしれない。先行研究やこれまでの評価を見ると、その試みはある程度成功しているとも言えるだろう。しかし、本論でこだわりたいのは、『東征伝』を「トレース」する過程で生じざるを得なかったそれとの差異である。そして、その差異を意味付けるために注目したいのが、『鑒眞大和上傳之研究』[11]（以下『研究』）の著者である安藤更生の存在である。そもそも井上が「鑒真来朝の経緯を小説化してみようかという気持になった」きっかけは安藤の「自分は学究として鑒真伝の研究をするが、あなたは小説家として、鑒真伝を小説の形で書いてみないか」という言葉であり、[12]そのような意味においても『天平の甍』と『東征伝』の関係を考察する際に、安藤の存在を無視することはできない。

これまでの研究では、物語本文と『研究』を直接結びつけるものはないが、それは『研究』の出版が『天平の甍』発表の後だからであろう。しかし、安藤が「帰国後それに引続いて『鑑眞大和上傳之

研究』といふ論文を書いた。これはまだ出版されてゐない」[13]と述べていること、また井上が「これ（『研究』―引用者注）が上梓される以前に、私はその労作を読ませていただく幸運を持った」[14]と述べていること、そして「その小説の基礎資料となったのが、当時まだ印刷されてなかった安藤博士のこの論文集であった」[15]といった指摘もあることを踏まえると、『研究』は『天平の甍』が書かれた時点においては「出版」されてはいなかったが、それは「印刷」されていなかっただけであり、井上はその「上梓」以前に『研究』の内容に触れていたと考えるべきだろう。したがって、『東征伝』が「小説化」される過程において、安藤の『研究』が影響を与えている可能性も考慮すべきであろう。

本論では、井上が安藤の『研究』を媒介に『東征伝』をどのように「小説化」したのか、そしてその過程で働いた歴史的な想像力とはどのようなものなのであったのかについて考えたい。

## 1、『天平の甍』と『唐大和上東征伝』

既に述べたように『天平の甍』は『東征伝』を主な典拠とする。これまでの研究では『東征伝』が物語に及ぼした強い影響が指摘されながらも、井上が直接参照した『東征伝』が具体的にはどのようなものであったのかについては触れられていない。『東征伝』には「何冊かの筆写本、何冊かの版本」[16]が存在することを考えれば、資料が「小説化」される過程を論じるためには、まずは、井上が資料とした『東征伝』がどのようなものであったのかということを明らかにしておく必要があるだろう。

作者は『天平の甍』執筆の経緯について、「『唐大和上東征伝』の文章」[17]の中で詳細に語っている。井上が『東征伝』を「初めて読んだのは昭和三十年の秋」であり、それは「昭和二十一年に京都の高桐書院から発行された」「所謂戒壇院本」であるという。しかし、井上が次のようにも述べていることには注意が必要である。

> この書を何日も机の上に置いたが、原文の漢文には閉口した。（略）／その後毎日新聞社の松本氏より「唐大和上東征伝」の和訳本を頂戴した。昭和十七年に大阪の堀朋近氏が発行して知人に配られたものらしく、薄い小冊子様のものであるが、それに中村詳一氏の筆で全文が訳されてあった。これを入手したことで、私は初めて「唐大和上東征伝」の全文をらくに読み下すことができ、更に安藤博士を何回も煩わすことに依ってその背景となっている歴史についての知識を得ることができたのである。

『東征伝』の「原文」に「閉口」していた井上は、「和訳本」によって「初めて」その「全文をらくに読み下すことができ」るようになったという。井上はまた「この「天平の甍」のもとになりました

のは「唐大和上東征伝」という名前で書かれた、三十頁ほどの小冊子であります[18]」とも述べている。このような作者の言葉を踏まえるならば、『東征伝』の「小説化」の過程を考察するためには、『和訳唐大和上東征伝』（一九四二年三月、堀朋近〔以下『和訳』〕）の影響も考慮しなければならない。『和訳』が物語に与えた影響の大きさは、本文に引用されている『東征伝』の文章から裏づけられる。

物語に引用されている『東征伝』の文章は原文の「漢文」ではなく、それを書き下したものである。例えば、栄叡の死の場面で引用される『東征伝』の文章を確認してみよう。

桂江を下ること七日、梧州に至る。次いで端州の竜興寺に至る。栄叡師庵然として遷化す。大和上哀慟悲切なり。喪を送りて去る―『唐大和上東征伝』には栄叡の死についてはこれだけの記述しか見出せない。（四章）

同じ箇所について『和訳』は「桂江を下ること七日、梧州に至る。次で端州の龍興寺に至る。榮叡師庵然として遷化す。大和上哀慟悲切なり。喪を送りて去る」と記しており、本文の表現と一致する。『和訳』が物語本文の表現に与えた影響の大きさが了解されるだろう。ここまで述べたような『天平の甍』執筆の背景を踏まえ、本論において物語と『東征伝』を比較する際には、その比較対象を『和訳』の本文としたい。

ただし、『和訳』の表現がそのまま使用されている箇所はわずかであり、物語の内容についても『東征伝』「そのまま」とは言いがたい。井上が言う『東征伝』の「小説化」とは、「『東征伝』に名前をのぞかせている何人かの人物に血と肉を与える[19]」というレベルに留まるものではない。両者は、鑒真の渡日をどのように意味付け、どのように語るかという構造のレベルで大きく異なっているのである。そして、その差異はそれぞれの冒頭部、つまり両者が鑒真の渡日の物語をどのように語り始めているかという点に顕著に表れている。

## 2、書き加えられた〈始まり〉

ここでは『東征伝』と『天平の甍』のそれぞれが、鑒真の渡日という歴史的出来事をどのように語り始めているかということを確認しておきたい。『東征伝』では冒頭に鑒真の簡潔な伝記的記述が置かれ、続けて、栄叡と普照が伝戒のために鑒真に渡日を要請する場面が語られる。そして、そこでは栄叡等が戒律を伝える人物を招請することになった経緯が次のように説明されている。

唐国諸寺の三蔵大徳皆戒律を以て入道の正門と為す。若し戒を持たざる者あれば僧中に齒（よわい）せず。是に於いて方に本国伝戒の人無きことを知る。仍て東都大福先寺の沙門道璿律師を請じて、

副使中臣の朝臣名代の舶に附して、先ず本国に向い去って、伝戒の者と為さんと擬す。（『和訳』）

『東征伝』の語り手は、栄叡等は唐に来て初めて「戒を持たざる者あれば僧中に歯せず」ということを知り、「伝戒の師」としてとりあえず「道璿」に日本に向かってもらうことにしたと説明する。栄叡等が唐において「伝戒の師」の必要性を知り、自らの判断で戒師を招請するために行動している点は『天平の甍』との差異として注意すべきである。さらに、栄叡等が鑒真に渡日を依頼する場面は、次のように語られている。

栄叡普照大明寺に至つて、大和上の足下を頂礼して具に本意を述べて曰く、仏法東流して日本国に至る。其法有りと雖も伝法の人無し。日本国に昔聖徳太子と云ふ人あり。曰く二百年の後聖教日本に興らんと。今此運に鐘（あた）れり。願くは大和上東遊して化を興し給へ。（『和訳』）

栄叡等はここで鑒真に「伝法の人」として渡日することを依頼し、鑒真は「是れ法事たるが為なり」と了承している。『東征伝』においては、鑒真に渡日を要請した栄叡・普照とそれを了承した鑒真との間には、「法」のためという宗教的な理由以外のものが存在しない。つまり、『東征伝』において鑒真渡日の経緯は、鑒真と栄叡等との関係性の内に閉じたものとして提示されているのである。

一方で『天平の甍』では、栄叡と普照に戒師招請という使命が託された歴史的文脈から語り始められる。物語は『東征伝』が語っていなかった戒師招請までの歴史的文脈をその〈始まり〉として書き加えているのである。そして、その〈始まり〉において説明されているのが、戒師招請の使命を担った遣唐使の目的である。

もともと時の政府が莫大な費用をかけ、多くの人命の危険をも顧みず、遣唐使を派遣するといふことの目的は、主として宗教的、文化的なものであって、政治的意図といふものは、若しあつたとしても問題にするに足らない微少なものであつた。（一章）

このような物語の〈始まり〉に注目したのが孫軍悦である。[20] 孫は物語冒頭部の分析を踏まえ、「読者はすでに、その「問題にするに足らない微少な」「政治的意図」よりも、「遣唐使派遣の最も重要な意味をなす留学生、留学僧」に注目するように予め方向付けられている」と述べる。さらに、初出から初刊への改稿によって「われわれの使命は多分に政治家的なものだ」という栄叡の台詞が、「少くともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの價値はあるやうだな」と書き換えられたことを踏まえ、改稿を経た物語の冒頭部を次のように意味付ける。

改稿では、戒律の整備という宗教の問題を戒師招請の目的とし

てことさら強調し、その「多分に政治家的な」側面と「重苦しい喋り方で喋った」栄叡の内面の葛藤がテクストから排除されてしまった。（略）読者は「二人の生命を賭けるだけの価値」がある仏教徒の使命として戒師招請の事業を理解するように導かれるのである。

たしかに改稿によって栄叡の「政治家的」な「使命」という言葉は消されている。しかし、そのことはすなわち物語から「戒師招請」の政治的意味が「排除」されたことを意味するわけではない。本文では「遣唐使を派遣するということの意味」は「主として宗教的、文化的なもの」とされているが、それはあくまでも「もともと」の目的であると書かれていることに注意したい。このような表現によって、むしろ読者は物語冒頭において戒師招請という使命を担った遣唐使の「もともと」の目的とは異なる「政治的」な意味に注目するように方向付けられることになるのではないか。でなければ、次のように物語の中で「為政者の悩みの種」が詳細に語られていることを意味づけることはできない。

課役を免れるために百姓は争って出家し、流亡していた。ここ何十年間かそうした社会現象を食いとめるために、幾十かの法律が次々に出されていたが、効果は一向に上がっていなかった。問題は百姓ばかりではなかった。僧尼の行儀の堕落もまた甚しく、為政者の悩みの種になっていた。僧尼令二十七条という僧尼の身分資格を規定した法令も出ているが、実際にはそんなものは無力でしかなかった。仏教に帰入した者の守るべき規範は何一つ定まっていず、比丘および比丘尼の受けるべき具足戒は三師七証（戒場に参会する十人の師僧）の不足で行われていない。目下のところでは仏徒は自誓受戒するか、三聚浄戒を受ける程度で放埒に流れ次第である。これらの仏徒を取り締まるのは、まず唐より傑れた戒師を迎えて、正式の受戒制度を布くことである。人為的な法律は無力であり、仏徒が信奉する釈迦の至上命令を以てこれに臨むほかはなかった。正しい戒儀を整えるのが、現在の日本の仏教界で一番必要であることは誰の眼にも明らかであった。こんどの遣唐使派遣の機に、二人の青年層を渡唐させようとする舎人親王や隆尊の意図もここにあるわけであった。（一章）

栄叡と普照の「二人の青年僧」を渡唐させる目的は「正しい戒儀を整える」ために「唐より傑れた戒師」を招請するという「宗教的」なものではあるが、それは同時に「課役を免れるため」の「百姓」の「出家」や「僧尼の行儀の堕落」といった「為政者の悩みの種」を解消するためのものであり、それが「為政者」の一人としての「舎人親王」の「意図」であるならば、「こんどの遣唐使派遣」

の目的は「もともと」のものとは異なり「政治的意図」が反映されたものになる。改稿は孫が述べるように「戒師招請の宗教的意義をことさら強調し、「日本の仏教界の混乱を防ぐといふ謂はば政治的とも言ふべき意味」を隠」すためのものではなく、自分たちの渡唐の意味をその一点に限定するような栄叡の認識を修正するためのものだったのではないか。

いずれにしても、戒師招請の目的に政治的意味を見出す物語の〈始まり〉は、『東征伝』のそれとは大きく異なる。そして、このような物語の〈始まり〉に影響を与えたのが安藤更生である。

## 3、『東征伝』の「小説化」と安藤更生

従来の研究において宗教的な目的という意味だけで捉えられていた戒師招請という出来事の背景に「政治的意図」を読みとったのが、『鑒眞大和上傳之研究』の著者である安藤更生だった[21]。

安藤は戒師招請の理由を、日本には「三師七證を得た完全なる僧侶」がいなかったためであるという宗教的な意味だけに限定してきた「従来の史家」に対して、授戒できる僧侶の不在はその時代に限定された問題ではないこと、また鑒真が渡日した後でも授戒を拒む僧侶が多かったことを根拠として、戒師招請には宗教的な理由だけではなく、「其時の特殊な事情」つまり「何か政治的意図」があったと推測している。そして安藤は、その「政治的意図」の背景に、同時代の仏教をめぐる歴史的状況を読み取るのである。

出家による百姓の流亡と、僧尼行儀の堕落とは為政者を困惑させた。幾回の禁令も徒らに外皮を撫でるのみで効は残らない。終に為政者もこの大勢は一片の法令を以てしては抑止し難いのを覚つた。かくて彼等は、仏徒を取締るには凡俗の律法に拠るよりも、仏徒が信奉する釈迦の至上命令を以て之に臨むに如かぬ事を知つた。／僧尼令は総て二十七條より成るが、その内容は、一般的に律令国家としての要求に基くものと、仏の戒律に乖く意味で定められたものとある。戒律を厳重に遵守せしめる事は、令の目的の大半を達する事である。／翻つて当時の日本仏教は、多くの先学の説かれる様に、戒律の施行が正しくなかつた。三師七證は戒師の不足に因つて行はれて居らぬ。仏徒は自誓受戒するか、三聚淨戒を受ける程度である。正式の具足戒を授け、放埒に流れる仏徒を取締るには、唐より傑れた戒師を迎へ、その正しき戒儀を整へる事が近道である。この智慧を出した者が恐らく元興寺の隆尊である。／隆尊はこの策を以て舎人親王を説き、親王はこれを採上げた。

「出家による百姓の流亡」と「僧尼行儀の堕落」という「為政者」を悩ませていた問題の原因を、「当時の日本仏教」が「正式の具足

戒」を授けるシステムを有していなかったという事実に求め、その対策として隆尊が「唐より傑れた戒師を迎へ、その正しき戒儀を整へる事が近道である」と考えたことが、「戒師招請」の経緯であるとするこの認識は、先に引用した物語本文と、内容や表現、論理の面で一致する。物語に書き加えられた〈始まり〉は、『研究』の叙述を元にしたものであることが了解されるだろう。

安藤の『研究』が『天平の甍』に与えた直接的な影響は、本文の多くの箇所で確認することができる。例えば、栄叡死後の普照の行動について、『東征伝』は「普照これより大和上を辞して嶺北に向ひ明州の阿育王寺に去る」とだけ記している。栄叡の死後、普照は鑒真の元を離れ「明州の阿育王寺」へと去っているが、その理由について『東征伝』は語らない。そのような『東征伝』における空白部を物語は次のように説明している。

開元寺に移った時、普照の気持ちは決まった。栄叡の亡い現在、鑒真を初めとする一行の僧たちを更に新しい冒険へ駆り立てる力は自分にはないと思った。それからもう一つ、他の唐僧たちとは違って、普照は日本の留学僧としての資格はなくなっていたし、鑒真らと再び揚州の地を踏めば、鑒真らの使嗾者として官からいかなる罪が下らないとも限らなかった。（第四章）

この後に明らかにされる「普照の気持ち」とは「自分はここで一行に別れ、鄮山の阿育王寺に行って、そこで日本への船便を待ちたい」というものだが、普照がそのような「気持ち」になった理由について物語では、普照自身が「栄叡の亡い現在、鑒真を初めとする一行の僧たちを更に新しい冒険へ駆り立てる力」がないと考えたこと、そして「鑒真らと再び揚州の地を踏めば、鑒真らの使嗾者として官からいかなる罪が下らないとも限らな」いと考えたことの二つが挙げられている。物語は『東征伝』が語っていない普照の行動の理由を説明しているのである。そして、このような説明の根拠となったのが、安藤の『研究』である。

安藤は『研究』で「普照が阿育王寺へ去った原因」として、「1　日本へ帰らうとしたものである事」「2　揚州へ帰れば再び捕縛される怖れがある事」「3　戒師招請が当分見込の立たなかつた事」「4　明州には知人がゐる事」という四つの「推定」を紹介している[22]。普照が鑒真一行からの離脱後に目指した場所が「明州」であった理由を、そこが日本への帰国には合理的な場所であったことと、「明州には知人がゐる事[23]」とする点、そして、普照が鑒真と共に揚州に向かわなかった理由を「揚州へ帰れば再び捕縛される怖れがある事」とする点、そして普照が一行から離脱した理由を「戒師招請が当分見込の立たなかつた事」とする点において、安藤の「推定」は物語の内容と一致する。『東征伝』の「小説化」は、『研究』の強

い影響下にあったのである。

先の例からも明らかなように、そもそも『東征伝』は出来事と出来事の間の空白が多い文献である。したがって、『東征伝』の「小説化」においてまず課題となったのは、その空白をどのように埋めるかということであったはずだ。そして、『東征伝』の空白が埋められる際にそれを方向付けたのが安藤の『研究』だったのである。

『天平の甍』では、「法のため」という共通の目的によって結ばれた鑒真と栄叡等の関係性という『東征伝』が本来的に有していた物語的特徴を損なわないように、その〈始まり〉として戒師招請の歴史的文脈が書き加えられている。それは作家自身が『東征伝』に「何もつけ加えるものがない」といった認識を持つほど、自然な『東征伝』の「小説化」だったのかもしれない。

しかし、『研究』の視点では説明できない一つの場面によって、『東征伝』は大きく書き換えられることになる。それが、遣唐大使たちが鑒真に渡日を依頼する場面である。

## 4、書き換えられた『東征伝』

藤原清河を遣唐大使とする第十次の遣唐使の一行が長安に入ったことを聞いた普照は、彼等を「鴻臚寺（迎賓館）」に訪ね、鑒真の招聘を依頼する。普照が遣唐使たちに鑒真を日本に連れ帰ることを依頼するという場面は『東征伝』にはない。安藤は『研究』の中で、日本から明州に到着した清河等が明州の阿育王寺にいた「普照から従來の経緯を聞かされて、大使が招請に同意したものと想像してゐる」と述べている。[24] 普照が鑒真を日本に招請するための苦労を清河等に語るという物語の設定は、この安藤の「想像」を踏まえたものであろう。しかし、清河等の態度は普照が予想していたものとは異なっていた。

> 普照は鑒真と労苦を共にしたこの国での何年かに亘る流離の生活をかいつまんで（清河に―引用者注）語ったが、その話はさして自分と同年配と思われる故国の高官を感動させることはできなかった。／感動しないという点では副使の吉備真備も同じであった。（五章）

孫軍悦は清河等の反応について、彼等の「無感動は、普照らが入唐する前に「為政者の悩みの種になつてゐた」問題がすでに緊急な政治課題ではなくなったことを表しているのではないか」と述べている。[25] 本文においても、普照等が唐に滞在している間に戒師招請の「謂わば政治的とも言うべき意味は完全に解消し」たと説明されており、孫が正しく指摘した通り、物語において語られた清河や真備の「無感動」は政治的状況の変化が原因であろう。彼等にとって戒師招請は既に重要な政治的課題ではなくなっていたのである。

戒師招請という使命が初出における栄叡が言うように純粋に「政治家的」なものに限定されるものであれば、「為政者の悩みの種」が解消された時点で普照等の使命は意味を失うことになる。ここに「われわれの使命は多分に政治家的なものだ」という栄叡の言葉が改稿された理由があるのではないか。改稿は冒頭部において戒師招請の政治的意味を「隠」すためのものではなく、その政治的意味が解消された状況において普照らの行動に意味を与えるためのものではなかったか。そのように考えると、初出では「日本の佛教界の混亂を防ぐために、傅戒の師を求める」という「謂はば政治的な使命」として位置付けられていた二人の渡唐が、改稿後は「政治的とも言ふべき意味」と「宗教的な問題」の双方を内包したものに修正されていることの意味も了解されるだろう。それは戒師招請という歴史的出来事を「政治的な使命」という一つの動機によって語ることによって物語に生じる矛盾を避けるための改稿だったのである。

そして、そのような改稿の根拠となったのが安藤の研究であった。『研究』において戒師招請という使命の「政治的意図」を指摘した安藤は、後に『鑑真』の中で、行基の「大僧正」任命によって「僧尼淘汰の主たる対象は消滅し」戒師招請が「政治を離れて純粋な宗教上の問題」に変化したことを指摘している[26]。安藤は『東征伝』が語らなかった戒師招請の歴史的背景を明らかにしたのである。それは「戒師招請の原因」を宗教的問題に求めることしかできなかった「従来の史家」とは異なる視点だった。そして、そのような視点を物語の〈始まり〉として取り込んだのが、『天平の甍』であった。

しかし、『東征伝』の中のある一つの場面を安藤の視点で捉えたとき、その場面は物語のこれまでの文脈と矛盾を生じないように大きく書き換えられなければならなかったのである。それが、清河等が鑒真に渡日を要請する場面である。

十月十五日壬午、日本国の使大使特進藤原朝臣、清河副使銀青光録大夫光録卿大伴宿禰胡麻呂、副使銀青光録大夫秘書監吉備朝臣真備、衛尉卿安部朝臣朝衡等延光寺に来至して、大和上に白して云く、弟子等早く大和上の五回海を渡つて日本国に向い、将に教を伝えんと欲するを知る。故に今親しく顔色を奉して頂礼歓喜す。弟子等先ず大和上の尊号幷に持律の弟子五僧を録して己に主上に奏聞す。日本に向かつて戒を伝えんと。主上道士を将て去らしめんと要す。日本の君王先に道士の法を崇めず。便ち奏して春桃原等の四人を留め、住つて道士の法を学ばしむ。此が為に大和上の名もまた奏退す。願わくは大和上自ら方便を作せ。弟子等自ら国の信物を載する船四舶在つて行装具足す。去るも亦難きことなし。時に大和上許諾己に竟れり。（『和訳』）

清河と古麿、そして真備と仲麻呂の四人は揃って「延光寺」の鑒

真を訪れる。そして、清河等は「大和上の五回海を渡って日本国に向い、将に教を伝えんと欲する」ということを既に知っていたことを伝え、鑒真に対面できたことを「頂礼歓喜」し、「願わくは大和上自ら方便を作せ」「去るも亦難きことなし」と鑒真に直接渡日を要請する。『東征伝』においては、鑒真招請が清河等遣唐使の使命として位置付けられているのである。

しかし、この時点において戒師招請の政治的意味が失われていたのであれば、なぜ遣唐使たちは揃って鑒真の招請に向かい、そこで「頂礼歓喜」したのだろうか。そのことについて安藤は「栄叡らを国に伴ひかへることは、出国の時から遣唐使に托されたことであったかも知れない。とにかく鑑眞渡日の招請は公けの外交問題としてとり上げられた[27]」と述べている。これは、『東征伝』の記述を重視し、戒師招請をあくまでも遣唐使の使命として位置付けるものである。しかし、そのような安藤の『東征伝』理解は、戒師招請が既に政治的意味を失っていたという歴史的文脈と矛盾するのではないか。

一方で『天平の甍』は同じ場面を『東征伝』とも安藤とも異なる視点で描いている。先に述べたように、物語における清河等は普照から渡日のための「何年かに亘る流離の生活」について聞いても、それに心を動かすことはない。そして、清河等は玄宗に「鑒真及び五人の僧の招聘を上奏」するが、それはあくまでも「それほどまでに日本へ渡りたいのなら、その鑒真とやらを一緒に連れ帰っては如何であろうか」という認識の元に行われたものであったため、「道士も一緒に」という条件が提示されたことで、上奏は取り下げられる。そして、そのことを報告するために清河らは揚州の鑒真を訪れるのである。

清河らの一行は夏の終りに長安を発ち、乗船地を目指したが、その途中清河、古鷹、真備、それに一行と一緒に帰国することになった阿倍仲麻呂を加えて、四人で揚州延光寺に鑒真を訪ねた。一行はこれまでの経緯を鑒真に話し、古麿が、／「願わくは大和上自ら方便を作して戴きたい」／そのような言葉で言った。表向きの許可は下りないが、鑒真に渡航の意志があるならば、行装具足した大船四隻の用意があるからそれを利用して貰いたいという意味であった。すると鑒真は静かに頷いて、自分はこれまでに五回海を渡って日本へ向ったが、いつも失敗した、こんどこそ日本国の船で本願を果たしたいものだと答えた。

（五章）

清河たちが揃って鑒真を訪れている点は『東征伝』と同じだが、物語はそのことの意味をこれまでの文脈と矛盾しないように書き換えている。『東征伝』ではまず遣唐使が「弟子等早く大和上の五回海を渡って日本国に向い、将に教を伝えんと欲するを知る」と鑒真

に伝えていたが、その言葉は鑒真のものへと書き換えられ、「鑒真がいかなる人物であるか、また伝戒の意味がいかなるものか知っていない」という物語の中の古麿の認識と矛盾がないように処理されている。また、「願わくは大和上自ら方便を作して戴きたい」という言葉は、『東征伝』では遣唐使が鑒真に渡日を要請する意味を含んでいたが、物語ではそれが「鑒真に渡航の意志があるならば」という「意味」に解釈されている。そして、物語では清河たちが鑒真に対面して「頂礼歓喜」する様子は語られない。『天平の甍』では、遣唐使たちが鑒真に渡日を要請し、鑒真がそれに応えるという『東征伝』が語った両者の関係性が消され、渡日の動機として鑒真本人の強い意志が語られているのである。なぜ鑒真は渡日したのか、その動機に関わる部分が書き換えられていることの意味は決して小さくない。

## おわりに

本論では、まず『天平の甍』の表現に影響を与えた文献として『和訳　唐大和上東征伝』の存在を確認した上で、これまでの研究では指摘されていなかった安藤更生『鑒眞大和上傳之研究』が『天平の甍』に直接与えた影響を明らかにした。そして、『東征伝』が「小説化」される過程において、様々な視点が取り込まれながら、『東征伝』とも安藤の『研究』とも異なる戒師招請の物語が生成されていく様相を捉えた。

既に述べたように、井上は『天平の甍』は『東征伝』を「小説化」したものであり、『東征伝』には「何もつけ加えるものはない」と述べている。そのような作家自身の言葉は、後の研究にも影響を与えてきたと言えるだろう。しかし、本論で明らかにしたように、『東征伝』を「小説化」する過程で井上が直面したのは、一つの解釈によってある歴史的出来事を矛盾なく語ることの難しさではなかったか。『天平の甍』の好評を受けて、井上は『敦煌』や『蒼き狼』といった歴史小説を書き継いでいくことになるが、その転機となった『天平の甍』の執筆過程において、矛盾を避けるために典拠の記述を書き換えていたことは記憶されておいてよい。ある歴史的出来事を複数の視点から矛盾なく物語化すること。『天平の甍』において井上が直面した課題は、この後の歴史小説の構想にも影響を残し続けることになるのである。

**注**

① 無署名「32年度芸術選奨」（『毎日新聞』一九五八年三月三〇日）

② 小松伸六「歴史小説ノート」（『赤門文学』第九号、一九五七年一一月）

③ 福永武彦「歴史にぶつかる情熱　井上靖・著「天平の甍」」（『東京新

聞（朝刊）』一九五七年一二月二三日）

④　佐伯彰一「鮮かな時間の刻印」（『日本読書新聞』一九五八年一月一日）

⑤　山田博光「井上靖『天平の甍』」（『国文学　解釈と鑑賞』第三五巻第四号、一九七〇年四月、至文堂）

⑥　村松定孝「井上靖「天平の甍」」（『古典と近代文学』第一一号、一九七一年一〇月）

⑦　井上靖「『天平の甍』の作者として」（『アカハタ』一九六一年五月一七日）

⑧　東野治之『鑑真』（二〇〇九年一一月、岩波新書（新赤版）一二一八）

⑨　槇林滉二「『天平の甍』の構造」（『佐賀大学教育学部　論文集』第三二巻第一号、一九八四年七月）

⑩　森井道男「井上靖「天平の甍」と『唐大和上東征伝』」（川口久雄編『古典の変容と新生』一九八四年一一月、明治書院）

⑪　安藤更生『鑒眞大和上傳之研究』（一九六〇年八月、平凡社）

⑫　井上靖「『唐大和上東征伝』の文章」（『日本文化史1　古代』月報六、一九六六年四月、筑摩書房）

⑬　安藤更生『鑑眞』（一九五八年六月、美術出版社、〇頁）

⑭　井上靖「「天平の甍」ついて」（『朝日新聞』一九六一年一二月、※初出時点での題名は「わが小説28『天平の甍』」）

⑮　無署名「出版された〝悲運の論文集〟」（『毎日新聞』一九六〇年八月二四日）

⑯　井上靖「『唐大和上東征伝』の文章」（前掲）

⑰　井上靖「『唐大和上東征伝』の文章」（前掲）

⑱　井上靖「井上靖先生にきく　『天平の甍』」（『月刊前進座』一五六号、一九六三年二月）

⑲　井上靖「『天平の甍』の作者として」（前掲）

⑳　孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳　テクストと社会の相互形成史』（「第一章　日中関係史のなかの『天平の甍』」二〇二一年二月二六日、青弓社）

㉑　安藤更生『鑒眞大和上傳之研究』（前掲、六四頁）

㉒　安藤更生『鑒眞大和上傳之研究』（前掲、二四一頁）

㉓　本文では明州の阿育王寺に到着した普照の心理を「ここには旧知の人も多勢いて、宛ら郷里へ帰ったような気持」になったと説明している。

㉔　安藤更生『鑒眞大和上傳之研究』（前掲、九二頁）

㉕　孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳　テクストと社会の相互形成史』（前掲、六六頁）

㉖　安藤更生『鑑眞』（前掲、九七頁）

㉗　安藤更生『鑑眞』（前掲、一五九頁）

〔付記〕　本稿で引用した井上靖の文章は、『井上靖全集』全二八巻・別巻一（一九九五年四月二〇日～二〇〇〇年四月二五日、新潮社）を底本とする。